

## 因陀羅再考—「観音図」を中心に—

李 宜蓁 (九州大学)

元時代の禅僧・因陀羅(生没年不詳)は、一連の国宝「禅機図断簡」(アーティゾン美術館、根津美術館、東京国立博物館、静嘉堂文庫美術館、畠山記念館)の作者として知られているが、1998年の大和文華館における特別展「元時代の絵画—モンゴル世界帝国の一世紀」で個人蔵「観音図」が新たに紹介されて以降、研究は進捗していない。

本作は牧谿筆の伝称があったが、「**壬**梵因為千佛□法師□筆時延祐改元季□□下」と判読される落款があり、延祐元年(1314)に因陀羅によって制作されと考えられる。さらに、禅僧・中峰明本(1263-1323)が撰した一文を杭州明慶寺の住持・虎巖嗣良(生没年不詳)が書した賛文を伴う点で注目される。因陀羅の生涯は、「禅機図断簡」中の「寒山拾得図」に確認される「宣授汴梁上方祐國大光教禪寺住持佛慧淨辨圓通法寶大師壬梵因」の落款から、従来、師号を下賜される晩年、汴梁(河南省開封市)の上方祐國大光教禪寺の住持だったことが知られ、同作における禅僧・楚石梵琦(1296-1370)の着賛は、至正(1341-68)末年頃、江南でなされたものと考えられてきた。作画と着賛された時期がそれほど隔たっていないと想定すれば、「禅機図断簡」も至正末年の作とみてよい。本作は、「禅機図断簡」の制作から少なくとも40年ほど遡る早年の作として、また因陀羅が江南仏教圏の中心であった杭州で活動していたことを示し、「禅機図断簡」のみから形成されてきた因陀羅に対する認識を再考する契機となる。

本作は、一般の観音像と大きく趣を異にする。頭光や身光を負わず、宝冠や瓔珞を着けず、蓮台を踏まないようすは世俗の人間を彷彿させ、襤褸を纏った貧民さながらの姿はとくに印象的である。賛文は、唐時代の禅僧・香巖智閑(?-898)の偈を引用し、観音の形姿が極限に達した「貧」の表象であり、そのあり方自体に「空」という悟りの境地を重ねている点に、教禅一致の思想を込める「如来禅」が示されている。賛の内容は、為書に示される「千佛□法師」なる人物が、禅師と律師に対して文字、経論を考究する法師を名乗る教僧であることに対応する。因陀羅の活動拠点は、元叟行端(1255-1341)との関係から行端が住持となった杭州・中天竺寺の可能性が高いが、本作は、当時、因陀羅が立場の違いを超えて教僧とも交流していたことを伝えている。

本作は、慈眼をもって観者に対する一般の観音図と対照的で、やぶにらみをもって観者や表象される絵画空間全体から視線を反らしている点も注意される。段階を踏んで徐々に執着を捨てる「如来禅」に対し、直ちに本来の仏性を悟る「祖師禅」の立場も、因陀羅の宗教観を知る手がかりとなる。画像と賛文とを相互に読み解くことで、因陀羅の早期における杭州での活動を証言する「観音図」に、禅と教禅一致の思想との緊張関係性が表象されていることを試論として提示したい。